

常照

第802号

『報恩講』をつとめる

ありがたい、ということ

いまから七百五十年ほど前、旧暦の十一月二十八日(新暦の一月十六日)、親鸞さまは九十年のご一生を終えられました。

その親鸞さまがご生涯をかけてあきらかにしていただいた教えを聞き、「ありがたいございます」と感謝するのが報恩講のおつとめです。

私たちが「ありがたい」と言うのはどんな時でしょうか。自分の欲

いものが手に入った時、自分の願いごとがかなったときなど、自分が何か得をした場合だけではないでしょうか。自分の損得をものさしにして、ありがたいか、ありがたくないかを判断しているのです。

ところが、このものさしほど当てにならないものはありません。状況によってコロコロと変わるからです。欲しくてたまらなくて買った物でも、時間がたってみれば部屋の片隅にゴミのようにほったらかしにされている、ということがよくあります。買ってくれた人に「ありがたい」と言ったことなどは、とくに忘れてしまっています。

自分にいのちが与えられたことを「ありがたい」と感じたことのある人は、どれほどいるのでしょうか。

多くの人は、自分が生きていることをあたりまえのように思っているのではないでしょうか。

しかし、自分で心臓を動かすことができる人は一人もいません。また、いやなことがあっても、心臓は黙って打ち続けてくれています。

そのような、私たちが日ごろ考えたこともないようなのちの意味を教えてください。それが親鸞さまです。すべてのものが平等に尊いのちを与えていることを示され、傷つけ合うことがどんなに悲しいことであるかを教えてくださいました。

親鸞さまは、私たちが欲しがっている物を与えてくださるわけではありません。私たちが損得のものさしを超えた世界に生きることを願っておられるのです。報恩講をおつとめ

するのは、親鸞さまの教えを聞いて、そのような世界に生きる者となるためです。

『親鸞さまの歩み』

浄(きよ)らかな

世界を求めて

親鸞さまは、今からおおよそ八百年前、京都にお生まれになりました。九歳のときに両親と別れ、その後、ただ一筋にお釈迦さまの教えを学びながら生きられました。二十九歳のとき、先生である法然上人と出会われます。そこで一生を決定する大切な教えを聞くことができました。それが「浄土真宗」の教えでした。

「浄土真宗」とは、「浄らかな世界へ浄

土)を求めて生きる」ということです。親鸞さまは法然上人と出あってから、生涯をかけて「浄らかな世界」を求め、また多くの人びとにそのことを教えられました。

私たちの住んでいるこの世界は、どんな世界でしょうか。私たちの世界には、いろいろな人が住んでいます。女の人や、男の人、お年寄りや、小さな子どももいます。身体の丈夫な人、あまり丈夫ではない人、勉強やスポーツが得意な人、苦手な人、お金持ちの人、そうではない人など、さまざまです。

そのような中で私たちは、他の人に負けないよう、勉強をがんばったり、スポーツをがんばったりして生きていきます。そして、少しでも賢く強く、偉くなることを目指しています。

す。私たちの世界はそのように、他の人との競争の上に成り立っています。

たしかに、そうやってがんばって生きることも大切なことかもしれませんが。しかし、親鸞さまが求められた「浄らかな世界」とは、それとはまったくちがうものでした。

親鸞さまは、さまざまな人が住んでいる世界の中で一番大切なことは、一人ひとりが、お互いに尊敬しあい、助け合いながら生きることだといわれます。

男の人も女の人も、強い人も弱い人も、それぞれがそれぞれの姿かたちで精一杯に生きています。その一人ひとりがお互いに助け合いながら生きることで、お互いが本当に大切な人だと敬いあえる、そういう世界

を「浄らかな世界」といわれるのです。そのような「浄らかな世界」とは、どこにあるのでしょうか。それは決して遠いところにあるものではありません。みんながお互いを大切に思い、助け合いながら生きることができれば、そこが「浄らかな世界」となるのです。お家でもいい、学校でもいい、できれば世界中がそうなればいい。みんな「浄らかな世界」を求めて生きてくださいと、親鸞さまは教えてくださっています。



十一月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 十一月七日(土)～十一日(水)

休 座

○後期 十一月十三日(金)～十六日(月)

北海道教区後志組無量寿寺

講師 朝山明彦師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院くださいますようお願いしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (〇三三) 二二一〇七四四番
FAX (〇三三) 二二九一四〇八〇番
テレホン法話 二二七一六六一番